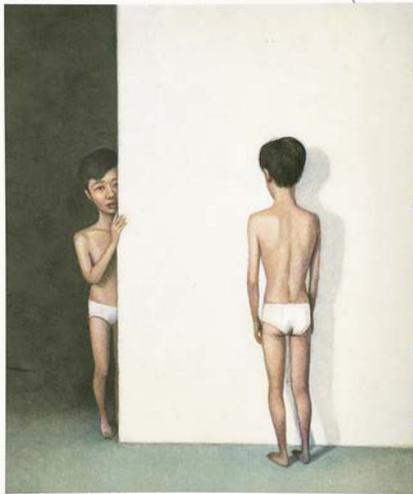


PERSONAL
PSYCHOPATHOLOGY
HARRY STACK SULLIVAN

精神病理学 私記



H・S・サリヴァン [著]
阿部大樹 [訳]
須貝秀平 [訳]

第6回
日本
翻訳大賞
受賞!

日本翻訳大賞を受賞して
阿部大樹
『精神科医が翻訳をする
ということ』

現代精神医療の基礎を築いた
アメリカ精神医学の先駆者サリヴァンが、
生前に書き下ろした唯一の著作を
約1世紀の時を経て初邦訳!

ご自由にお持ちください

■受賞歴

第6回 日本翻訳大賞 受賞
紀伊國屋じんぶん大賞2020 28位入選

■原著者略歴

ハリー・スタック・サリヴァン (Harry Stack Sullivan)

1892年、ニューヨーク州シェナゴ群に、アイルランド系移民3世として生まれる。1917年にシカゴ医学校を卒業後、陸軍連絡将校を経て、23年よりシェパード・イノック・アンド・ブラット病院で臨床医となる。30年代より、重症精神病に対するインテンシブな心理療法を特徴とする、北米の力動精神医学の中心的存在となる。第二次大戦以降、国際精神保健体制の確立のために運動するが、49年にパリ滞在中に客死。

著書に『現代精神医学の概念』『分裂病は人間的過程である』など。

■訳者略歴

阿部大樹 (あべ だいじゅ)

1990年、新潟県に生まれる。新潟大学医学部を卒業。東京都立松沢病院、聖マリアンナ医科大学を経て、現在は川崎市立多摩病院神経精神科長。「サンフランシスコ・オラクル」誌の日本語版翻訳・発行を行う。他に訳書として『レイシズム』(ルース・ベネディクト著、講談社学術文庫、2020年)がある。

須貝秀平 (すがい しゅうへい)

1990年、滋賀県に生まれる。東京大学医学部を卒業。東京都立松沢病院を経て、現在は東京大学大学院医学系研究科機能生物学専攻システムズ薬理学教室に所属。

●カバー作品

海老原 靖 (えびはら やすし)

1976年、茨城県に生まれる。2001年東京芸術大学大学院修士課程修了。映画のワンシーンを切り取った「NOISEシリーズ」、1990年代に爆発的人気を得た子役の象徴的存在を描いた「MACAULAY CULKINシリーズ」など、消費され消えゆくものをモチーフに、繊細な筆のタッチで何層にも重ねられた油絵の他、立体、写真、パフォーマンスなど様々なメディアで作品を発表してきた。

●書誌情報

『精神病理学私記』(原著: Personal Psychopathology)

本体5500円+税 A5判上製 400頁 ISBN:978-4-535-98468-4 初版刊行:2019年10月

※本誌掲載の記事、写真、イラストなどの無断転載を禁じます。



日本評論社

<https://www.nipponyō.co.jp/>

〒170-8474 東京都豊島区南大塚3-12-4

TEL: 03-3987-8621 / FAX: 03-3987-8590

●ご注文は日本評論社サービスセンターへ

TEL: 049-274-1780 / FAX: 049-274-1788

精神科医が翻訳をするということ

わたしは街場の精神科医であって、翻訳によって生活をしている者ではありません。そういう、いわばアマチュアの間人が、まったく思いがけず日本翻訳大賞をいただくことになりました。それに就いて考えたことの幾つかを書き記しておこうと思います。

学術書が大賞に選ばれたのは初めてのことでした。しかし私自身の印象からいうと、精神病理学という営みはまだ「学問」と呼んでもらえるほどには発展していなくて、属人的といえますか。「誰がやっているか」に今でも大きく依存していると思います。科学というよりも技芸の範疇にあるようです。フロイトとかユングの翻訳にまず取りかかったのも日本では文学者たちでした。

この文学を「人間を理解するための行い」として考えれば、精神医学も文学の一端であると言えます。知ろうとしてどこまでも深く掘り下げるといよりは、その時々への逼迫した要請に応じていくのですが――。文学を数学に例えるなら、精神医療は物理学のような役割を果たします。そういう点からは精神病理学を（応用人文学）とか（人文学を实践すること）と捉えられるかもしれません。

『精神病理学私記』を遺したハリ・スタック・サリヴァンも同じように考えていたのではないかと感じます。文学作品からとても多くの、しかもただ形式的というのではない引用がとられています。従軍記録をもとに描かれた『西部戦線異状なし』、芳醇な幻覚体験を香らせた『阿片常用者の告白』、あるいは『罪と罰』。一九二〇年代のシカゴに生まれたハードボイルド・ミステリについての記述もあります。

わたしにとって翻訳することは、白衣をきて患者さんの話を聴くことと、ちょうどボジとネガのような関係にあります。翻訳には時間制限がない。百年前のニューヨークの街角であった些末な喧嘩の記録をみるために、三か月もかけて当時の新聞を取り寄せたこともありました。そうやって突き詰めたところに、訳文が浮き上がってきます。

臨床はこれと鏡像のような関係にあります。まず第二に時間制限がある。診察の必要なひとは少なくとも一日に二十人以上を診なくてはなりません。診察室では、過去や深いところの心理をすべて明らかにするというよりは、核心のところをピンセットでつまみあげることには注意を向けます。浮き上がってくるのを待つというよりも、もつと積極的に、つまみ浮き彫りにするのが仕事です。

三年にわたる翻訳プロセスのなかで、この二つの作業がわたしの生活の歯車になつていきました。つまり正反対の向きに回っているのですが、びたりと噛み合っているのです。『精神病理学私記』を訳すことは、わたしにとって精神科医であることを内省することの二環でした。この訳書がまた誰かの歯車となつてくれれば、無上の喜びです。

阿部大樹